



2026 年 6 月 22 日

「第 89 回日本皮膚科学会東部支部学術大会 ①

大会を終えて」

秋田大学大学院 皮膚科学・形成外科学講座 教授
河野 通浩

はじめに

第 89 回日本皮膚科学会東部支部学術大会を、2025 年 9 月 27 日、28 日の 2 日間にわたって開催いたしました。当教室での開催は、前任の眞鍋求名誉教授が 2008 年に主催されてから 17 年ぶりとなります。

開催の 2 年前、学会の準備に取りかかるときにはまだ COVID-19 の影響が続いており、その年の学会を担当された会頭の先生方はハイブリッド開催にするか、懇親会の有無など、さまざまな点で判断に苦慮されたと思いますが、私たちは準備の段階からその影響は

少なくなってきたので、現地開催のみとしまして、久保田城跡である千秋公園そばの秋田キャッスルホテルと、それに隣接する秋田市にぎわい交流館 AU の 2 施設を会場としました。お堀端の歩道があり、同じ敷地内には藤田嗣治の「秋田の行事」という巨大な壁画が収納された県立美術館も併設されていて、秋田にいらっしゃった皆様にぜひお越しいただきたいかった場所のひとつです。

期間内には、東部支部だけでなく、日本全国から 680 名の方にお越しいただき、学会にご参加いただきました。本当にありがとうございました。

大会テーマは「ひふのひろがりを感じよう」としました。皮膚科学のさまざまな分野で進みつつある新しい知見を分かりやすく学び、“感じる”ことができるような学会に



したい、という願いからつけたテーマです。ポスターやプログラムには私たち皮膚科医の色々な場面をきれいなイラストにして掲載しました。そのなかには、なぜか白衣を着て包丁ではなくメスを持っているなまはげや、秋田犬、竿灯、タツコ姫、ババヘラアイスなど秋田の名所・名物も入っています。コングレスバッグにもなまはげの小さなマークを入れてご参加いただいた皆様に配布いたしました。おかげさまで準備したバッグはすべて配布できました。

プログラム

さて、学会のプログラムを振り返りたいと思います。海外招聘講演としては、ブルーブックと呼ばれている、WHO Classification of Skin Tumours, 第5版の執筆者のおひとりで、Massachusetts General Hospital、Harvard Medical School 教授でいらっしゃる Lyn Duncan 先生をお招きしました。先生は皮膚病理医で、今回はメラノサイト病変についての最近の知見をお話しいただきました。メラノサイト病変の分類やメラノーマの診断は近年大きく様変わりしてきておりますので、中間悪性の melanocytoma を含めて、歴史的な流れも踏まえてのご講演でした。私の恩師である Harvard Medical School の Martin Mihm 先生もお招きしたかったのですが、2022 年にご逝去されており、秋田にお招きできなかったことは本当に残念でした。特別講演としては、厚生労働省 大臣官房 危機管理・医務技術総括審議官の佐々木昌弘先生から、「これからの医療の展望と政策」のタイトルで、これからの患者数の見通し、医師数の需給バランス、各診療科別医師数の推移などのデータを示しながら、医師偏在、美容医療、OTC 医薬品、医療 DX など今後の政策について解説いただきました。



シンポジウムは2つに絞って開催しました。ひとつは医学教育をテーマとして、広島大学医学教育学の蓮沼直子教授にオーガナイズ、本学医学教育学の長谷川仁志教授に「皮膚科教育のポイント」をご講演いただき、事前アンケートで集めた現場からの「学生教育での困りごと」についておふたりからアドバイスをいただきました。もうひとつは遺伝性疾患のセッションで、角化異常症、水疱症、結合組織疾患、モザイク疾患について、長年お世話になった名古屋大学皮膚科の秋山真志教授をはじめとするエキスパートの先生方にご解説をいただきました。

教育講演は8つのテーマを立てました。悪性腫瘍、膠原病、色素異常症、酒皰・ざ瘡とスキンケアのほか、「慧眼の臨床、熟練の病理」、東北真菌懇話会とのコラボレーション企画として「外国籍の方から分離された稀な真菌症」、千葉大学形成外科学の三川信之教授による「形成外科医から皮膚科医へ伝えたいこと」、秋田県健康環境センターの樫尾拓子先生と本学救急・集中治療医学の中永士師明教授から、秋田の新旧風土病である、ツツガ

ムシとクマ外傷についてご講演いただきました。ちょうど秋田でのクマ外傷の被害が全国ニュースになっておりましたので、「秋田の新旧風土病」のセッションは立ち見が出るほど盛況でした。そして、後日談として、学会開催の1週間後に、学会場から道路を挟んで向かいにある千秋公園にもクマが出没し、ひと月ほど公園への立ち入りが禁止になってしまいました。もし、1週間早くクマが出没したら...もしかすると出席者ゼロになっていたかもしれません。そうならなくて本当に良かったです。

文化講演も2つ企画しました。ひとつは、フランス文学者で古書コレクターである明治大学名誉教授の鹿島茂先生に「古書収集とは失われた世界の復元である」というタイトルでお話しいただきました。19世紀フランスの風俗を紹介するエッセイを読んで是非お話を伺いたいと思っていましたが個人的な願いを叶えることができました。ふたつめは、秋田で最も有名な日本酒の一つであるNo.6の製造元である新政酒造株式会社の社長、佐藤祐輔様から「伝統産業を継ぐということ」というテーマで、新しい日本酒を作るなかで、いかに伝統的な製法にこだわっているか、ということをお話しいただきました。

「秋田らしさ」を感じていただくおもてなし

せっかく秋田に来ていただいたのですから、会場内でも秋田を感じていただけるよう、会場ロビーに秋田の夏祭り「竿灯」の実物をお借りして展示しました。皆様に記念撮影を楽しんでいただきました。会期中のドリンク・お菓子コーナーには秋田の銘菓を取り揃えて楽しんでいただきました。

懇親会では、秋田の地酒や郷土料理を取り揃え、県外からの参加者に秋田の味覚を堪能していただきました。ババヘラアイスの実演提供も行いました。ババヘラアイスとは秋田の夏には欠かせないもので、道路沿いで売っているアイスなのですが、ヘラで上手にアイス盛った形が花びらのようだという事で有名になったものです。初めて目にする皆さんからは歓声が上がっていました。アトラクションとして、迫力あるなまはげ太鼓の演奏に会場は大いに盛り上がりました。なまはげの台詞は「悪い子いねがー」がオリジナルですが「論文書かねえ子いねがー」のアレンジを加えて、演奏中に舞台から降りて練り歩き、かわいそうに捕まってしまった先生が何人かいらっしゃいました。懇親会には多くのご来賓の先生方もご参加くださり、終始和やかな雰囲気の中で交流が深められました。



おわりに

地方開催の学会では、アクセスや宿泊などの面でご不便をおかけすることも少なくありません。本学会でも、昨今のインバウンドの戻りの影響か、学会期間中のホテルが取りにくいというお声もいただきました。その一方、地域の文化や人の温かさに触れていただくことが地方開催ならではの魅力でもあります。参加者の先生方から「秋田らしい良い学会だった」「食事も催しも印象に残った」といったお言葉をいただき、主催したものとして大変うれしく思いました。

本大会が無事に終わられたのも、日本皮膚科学会学会チームの皆様、とくに山田紀子様のご尽力のお陰です。まずはじめに御礼申し上げます。

東部支部の先生方、全国の先生方には、学会へのご参加、ご尽力いただきまして心より感謝申し上げます。多くの企業からも多大なるご支援いただきましてありがとうございました。

最後になりますが、秋田大学皮膚科・形成外科同門会および秋田県皮膚科談話会の会員の先生のご厚意、そして、事務局長を務めてくださった野口奈津子先生、医局秘書の京野恵理子さんと石沢沙織さんをはじめとする、教室の先生方とスタッフの皆さんのご協力、ご尽力に改めて感謝申し上げます。



「マルホ皮膚科セミナー」

https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/